

カレンダーの向こうがわ

小堺 昂

うるゝ年の二月二十九日の真夜中に、カレンダーの向こうがわへ行けるらしい

かっちゃんと言ってたんよ

二月と三月のハザマに取り残されて、こっちがわに戻ってこれるのは四年後なんやって

腕がするりんと、まるで溶けてしまったみたいに、数字の世界に消えていくん

だあれもかっちゃんの言うことなんて信じんよ

かっちゃんはひとりで試してみるんやって

みんなバカにしてたわ

でもぼくはさ、ひよっとすると、もしかしたら本当なんじゃないかってだから試してみたいんよ

今日が二月二十九日だからさ

だれにも内緒でね

友だちにも、おとうにも、おかあにも、かっちゃんにも内緒でね
言ったらぼくまでバカにされると思うから

カレンダーはただの紙だってさ

ぼくだってそんなのわかってら

でももしかしたら、もしかすると、そうなのかもしれないじゃん
ごはんも食べて、おふろも入って

おかあもおとうも眠ってからね

真っ暗な部屋に、理科で配られた豆電球を一つ照らして

二月のカレンダーに、近づいてみるんよ

黒と赤の数字がびっしり書かれた、数字の羅列で、目がぐるぐる回って